

郷土摂津

いにしえ通信

第57号 平成15年1月1日

発行 摂津市教育委員会 生涯学習部生涯学習課

〒566-8555 摂津市三島一丁目1-1

TEL (06) 6383-1111 TEL (072) 638-0007

ホームページアドレス <http://www.city.settsu.osaka.jp/>

新年のごあいさつ

新年あけましておめでとうございます。世相は厳しく、日本の歴史も大きな転換期をむかえています。いつの時代でも歴史の中心には庶民の生活があり、日本の各地で祖先の生活の営みの足跡が発見されています。これからも本市の文化財行政にご理解ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

生涯学習課長 芝野孝一



第10回

川船のにぎわい

シリーズ!
淀川を往来した船

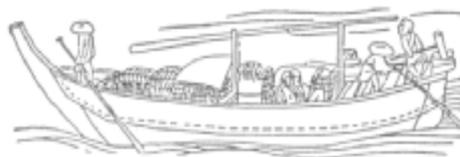
川船のにぎわい 「天下の台所」である大坂には、菱垣廻船、樽廻船、北前船をはじめ諸国からの船が絶え間なく出入りしていました。これらの外航船で運ばれた貨客は、川船によって大坂市

上荷船	1,595 艘
茶船	1,031 艘
廻船	183 艘
柏原船	70 艘
天道船	450 艘
剣先船	211 艘
土船	26 艘
砂船	168 艘
石船	18 艘
勸進船	29 艘
過書株船	162 艘
新上荷船	500 艘
新茶船	300 艘
新剣先船	100 艘
新三十石船	44 艘
計	4,887 艘

中および近郊へ運ばれていきました。淀川水系には、これまで紹介しました過書船（三十石船他）、茶舟（くらはんか舟）、今井船、伝道船など数多くの船でにぎわっていました。左表の延宝7年（1697）の「難波雀」に大坂の船数の記述が見られます。

これらの他にも、種々の渡し舟や村持ち手舟、屎舟など諸川筋は船がひしめく状態だったのでしょうか。

これらの川船は、いずれも幕府との間になんらかの縁故があり、特権的営業の許可を受けた船ばかりでした。幕府は特権的許可を認可するとともに、船主には運上銀を課しています。



←**今井船** 本来は京都御所に鮮魚を運ぶための船首を鋭くした快速船ですが、普通の旅客も乗せていました。鉄道開通以前、京都の魚市場の大部分を取り扱っていました。



講座や展示のご案内、活動報告など多彩な文化財情報を毎月お知らせします。また、このページでは皆様の投稿を募集しています。

講座開催のお知らせ

ふるさと摂津案内人

摂津市の歴史を楽しく学習しながら、案内人を養成していく講座です。歴史は当時の人々による生活の積み重ねで決して難しいものではありません。あなたの言葉で摂津市の歴史を伝えていきましょう。

養成講座

日時・会場

1回目	2月26日(水)	摂津市役所・第10会議室
2回目	3月5日(水)	摂津市役所・402号室
3回目	3月12日(水)	摂津市役所・402号室
4回目	3月19日(水)	三宅地区歴史散策

※時間はいずれも午後2時から4時まで

講座内容

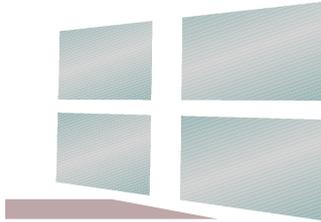
1回目	三宅全般の歴史 (担当 茗荷)	三宅の古代から現代までの歴史と歴史散策コースの説明。
2回目	三宅城 (担当 伊部)	城の概念、弥生時代の環濠集落から中近世の城までの変遷。三宅城について。
3回目	流れの馬場 (担当 茗荷)	一向一揆、蓮如教団、道場と寺内町、勝久寺と石山合戦について。
4回目	歴史散策 ※ふるさと摂津講座にて講師をお願いします。	《コース》 摂津市役所→鶴野神社跡→平和公園→三宅城跡→万福寺→井於神社→乙ノ辻街道→力石→流れの馬場跡→境川→総合福祉会館

申し込み

生涯学習課へ(電話可)平成15年2月1日から受付開始。

定員は10名(定員になりしだい締め切ります。)

電話 (06) 6383-1111 (072) 638-0007



郷土史コーナー

三宅（みやけ）の歴史

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

戦乱の時代と三宅

石山合戦と三宅 元亀元年（1570）、本願寺 11 世顕如は戦国動乱に際し中立の立場を守ってきましたが、織田信長から五千貫の矢銭を果たされたうえ、蓮如以来の要害石山本願寺の明渡しを迫られましたので、ついに信長を法敵とする姿勢を明確にしました。顕如は全国各地の門徒に、協力を拒む者は破門にするという強硬な檄文を配布して、総決起をうながしました。また、三好党や浅井・朝倉とも密接に連絡をとって、信長との決戦にふみきりました。9月12日の夜半、本願寺では寺内の鐘を打ち鳴らし、鉄砲を放ちながら信長勢を急襲しました。これが11年にわたる石山合戦の開始となりました。

本願寺は、頑強に抵抗し続けますが、信長の勢力が周辺各国に広がるにつれて孤立化していきました。天正7年（1579）11月、荒木村重の有岡城（伊丹市）が落城し、村重の敗北は本願寺にとって大きな打撃となりました。そのうえ、頼みにしていた毛利氏も、このころには羽柴秀吉が担当した中国地方経略の進展によって、本願寺を助ける余力を失っていました。これまで備前・美作に勢力をふるっていた宇喜多直家が毛利氏を裏切り秀吉側につき、天正8年1月には、別所長治がたてこもる播磨三木城も落城しました。四周の情勢はことごとく不利となってしまいました。

信長は、石山本願寺の要害を強攻するよりは、最も有利な条件で講和する方法を選びました。それは天皇の斡旋による講和でした。すでに、7年12月に、信長の願いによって正親町天皇は勅旨を本願寺に使わして講和を勧めていました。その条件は本願寺の大坂退去でしたから、本願寺側では容易に衆議は一決しませんでした。しかし、顕如はついにこれをのみ、8年3月には双方から誓紙を差し出し、講和が成立しました。4月9日、顕如は大坂を退去して、紀州雑賀に移りました。ところが、顕如の子で新門主となった教如は、大坂退去を不服とする門徒をひきいてなおも籠城し、諸国の門徒に激をとばして、抗戦をつづけました。しかし、7月には荒木一族の最後の拠城華熊城も落ち、ついに石山本願寺を保ちきれなくなって、8月2日に教如も大坂を退去して紀州鷲森に移りました。このとき、石山本願寺は火を發して、全寺域を焦土と化しました。ここに本願寺・一向一揆の抵抗も終結し、畿内はすっかり信長に服したのです。

石山合戦は3月に講和が成立したので、石山本願寺に籠城していた勝久寺（千里丘東3丁目）の住職頓恵や百姓たちはいったん自分たちの村に帰りました。しかし、教如が徹底抗戦を呼びかけたので、勝久寺門徒はこれに呼応しました。天正8年5月28日、法話や読経のため多くの人が勝久寺に集まっているとき、ふいに信長の軍勢が来襲し、本堂を焼き払い、集まっていた信徒たちを殺害しました。このとき、血が川となって流れたところが、「流れの馬場」と呼ばれるようになりました。また、死体を少し離れた谷に埋めたので、ここを「死屍谷（しかばねたに）」と呼んだと伝えられています。

「撰津市史」「撰津市域の歴史と昔の暮らし」より

担当 （茗荷）

第22回

埋もれた
摂津市の歴史

発掘調査で明らかになっていく摂津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

平成9年度

東正雀13-1 試掘調査

その5

水辺の祭祀の分類について 先月号では、祭祀行為について、立地的側面について紹介しました。また洪水多発地域に多く見られる水辺の祭祀については、その遺跡の性格上から祭祀行為の考古学的所見が少ない事も紹介しました。

そのなかで、出原恵三の研究「祭祀発展の諸段階・古墳時代における水辺の祭祀・1990」における水辺の祭祀の形態と変遷については注目に値するものです。この論文のなかでは、4世紀から6世紀にかけての水辺の祭祀についての諸例について考察し、遺物の出土状況、組成、空間的位置関係等の分析視点からⅠ～Ⅴ類に分類しています。祭祀の後に投棄している状況のⅠ類と原位置を保っているⅡ～Ⅴ類に大別しています。また、Ⅱ～Ⅴ類の細分については、柱穴など遺構の有無や祭祀に係る遺物の日常的使用などの事項が分類の基準となっています。

出土状況について 今回の試掘調査における出土状況は、土坑の中からの出土で原位置を保っていると言えます。検出面では甕と小型丸底壺が見られる状況でした。この検出面の下層は河川氾濫堆積で軟弱な堆積でした。そこで、この甕を支えるために高坏の脚部分を折り、坏身部分で固定している状況でした。これらの状況から、この場所に土器を置く行為に強い意志が働いたものと思われまます。また土器群の西からは断面にかかる形で土坑が一つ検出されました。この土坑からは遺物の検出はありませんでした。確認できた範囲では単独の検出で性格づけは困難と言えます。祭祀に建物跡を伴うか否かは、祭場のことも含め大きな問題なのですが、今回の調査例では十分な判断材料がないという状況と言えます。しかし前述分類では、原位置を保ち、柱穴が一つの例もⅡ類の祭祀形態の中に含めています。

担当 (伊部)



←土師器甕・小型丸底壺検出状況

左が小型丸底壺検出状況。横たえた状況で胴部および口縁部の一部は削平されていました。

右が甕検出状況。正位置に置かれていました。口縁部は削平されていました。この甕の固定のため、下に高坏を配置した状況で確認されました。